

## 母なる沈黙から生まれる Charles Simic の詩

### Charles Simic's Poems: Products of Maternal Silence

坂本季詩雄  
Kishio SAKAMOTO

SUBSCRIPT: Charles Simic was born in Yugoslavia in 1938 and left his country for America at the age of sixteen. He is one of the most popular and influential American modern poets. His poems are full of mysterious and dark images which give the readers clear impressions of his world. But we cannot find what his poems mean very well. His linguistic ability, consisting of two languages such as Serbo-Croatian and English, gives his poems the uniqueness which comes from the process of translating pre-linguistic concepts, which are moving aimlessly in a place called maternal silence, into the expressions. Temporary encounters of signifiers and signified produce a series of words there and the poet assembles them into a poem with satisfaction of approximate identification between words and mind. The loose connection makes his poem modern and attractive. This paper examines Simic's poetics and his poetic world through his unique idea for maternal silence.

#### はじめに

Charles Simicは1938年に旧ユーゴスラビアのベルグラードで生まれた。彼の幼少時にはナチドイツがベルグラードを占領し、後には戦闘が行われた。ナチが去った後も、53年にパリへ出国するまで内戦にまきこまれることになった。しかし戦場で育ったことはトラウマとして後々まで残る傷となるより、風変わりな思い出として彼の詩のなかに姿をあらわす。アメリカへすでに移住していた父をのぞき、母弟とともに、二度祖国からの脱出を試みるがともに失敗。やっと53年にパリへ逃れ、54年8月、16才の時にアメリカ合衆国、ニューヨークへ上陸。その約一年後に父を含め家族全員でシカゴへと移住した。高校時代に詩を書き始め、58年にニューヨークへもどり、ニューヨーク大学を卒業、様々な職種を経て、現在では20年以上University of New HampshireのEnglish Departmentで教鞭を執り、ワークショップから詩人を輩出し、自らの詩作においても多作な作家として活躍中である。現在アメリカを代表する詩人の1人で、すでに90年にピューリツァー賞を受賞し、97年度のNational Book

Awardの詩部門では、Lucille Clifton、Alicia Ostrikerらと並び最終候補者として名を連ねた。英語で自らの詩集を出版するほか、第一言語であるSerbo-Croatianを駆使してユーゴの詩人、Vasko Popa、Ivan V. Lalicなどの作品の英語への翻訳を手がけている。またロシア語やフランス語で書かれたものの翻訳も試みている。今まで受賞した賞も、Edgar Allan Poe Award、Harriet Monroe Poetry Award、P.E.N. Translation Prizeの他多数ある。

Simicの描く世界は、平凡な現実生活と驚異の世界、喜劇と悲劇、歴史と自然に潜む暴力と詩の作り出すリアリティーなどが併置されている。そうして作り上げられるシュールレアリスティックな世界は、神話あるい神話的意識に現代的な味付けをした魅力を持っている。

#### 1. 二つの言語と沈黙

彼の詩の特徴は短く、シンプルな表現、語彙の選択、動詞を使わないフレイズの使用などがあげられる。その背後にある言葉に対する感覚に、私は一番の魅力を感じる。その秘密は、英語で詩の創作をつ

づけながら、第一母語であるSerbo-Croatianで書かれた詩を翻訳することのなかにあるように思われる。1

彼にとってスラブなまりの英語はすでに何をするときにも用いる言語だ。彼にとってのアメリカは愛する文化や社会をもち、離れていると一番帰りたいと思う、自分にとっての故郷と彼は考えている。一方移民一世として彼がよく問われる質問は、母国とアメリカとの関係だ。幼少時を過ごしたユーゴスラビアでの生活、死んだドイツ兵からWar Junkをとり、仲間の子もたちと遊んだりした体験、ゲシュタポに父親が連行された夜の思い出。アメリカへの憧憬。実際アメリカへきてからの興奮に満ち溢れた日々。それと母国の詩人、Popaとの交流を通じたセルビア語から英語への翻訳の作業などがインタビューやエッセイのなかで語られている。アメリカ社会や文化に、16才以降ずっとひとりつづけながらも、母国語や母国の思い出を絶つことなく生きてきたのだ。二つの母国、ユーゴスラビアとアメリカを持つSimicが、第一言語であるSerbo-Croatianと第二言語であるAmerican Englishを駆使して翻訳作業をすることは、彼の作品を理解する上で無視できない。そのことは彼のアイデンティティーの問題と絡めてTomislav Longinovicが次ぎのように評している。

The gap between Dusan Simic and Charles Simic, the Serbian boy and the American poet, the native and the exile, is constantly being bridged by the interplay of language, dream and memory. The imaginative attempt of the American poet to reach the distant world of childhood is made possible by the process of translation which links the two identities. 2

また創作言語につて、母語を使って詩を書くのか、と問われたとき、Simicは母国語や英語からの距離感を常に意識しながら創作していることを次ぎのように語る。

I don't think anymore in my native language. . . I think it does give me some distance. I don't take the language, English, for granted. Sometimes I do, of course, but it's a question of

degrees. I am aware, for example, that at some point I've learned such and such a word. Over the years, my first language has become less and less of a presence . . . 3

そんな彼が2つの言語を使うときに、彼の頭脳のなかにコンセプトとして浮かんだことを、ある単語やフレーズと結びつけアイデアへと変換する。この作業の過程につて、二カ国語あやつる詩人として、こだわりを感じるのも自然ではないだろうか。言語化の過程にぽっかり空いた「穴」、そこでは言語化されていない「もの」の存在する場なので「沈黙」といえる空間が二言語を使う意識の中には生じることには彼は気づいている。

To be bilingual is to realize that the name and the thing are not bound intrinsically. It is possible to find oneself in a dark hole between languages. I experience this now when I speak Serbian, which I no longer speak fluently. I go expecting to find a word, knowing that there was a word there once, and find instead a hole and a silence. 4

さらに言語観においてSimicは言語に先立つものの存在を信じていても、思考と言語の間には何かしら等しい関係があるという立場を取らない。

I've always felt that there is a state that precedes verbalization, a complexity of experience that consists of things not yet brought to consciousness, not yet existing as language but as some sort of inner pressure. (UC 61)

このようにある意味では神秘的な"silence"という場は、"a verbally impossible situation"言語化の不可能な状況、あるいは特定されない「それ」、「あれ」という指示代名詞しか存在しない空間である。そこに詩人として身をおくことによりSimicは詩作を始める。5 自らのコンセプトを言語化しようとする詩人として、この困難な状況下で自分の経験と言葉、あるいはフレーズの最小限の一致ををさぐり、それをきっかけに言語化された空間へ移動する

のだ。

"Dismantling the Silence"は「沈黙を分解する」ことを試みている作品である。この「沈黙」は擬人化されていて、耳や目、身体を持つ。その身体はひとつの空間で、聴覚、視覚を初めとして様々な器官を内包していて、外界からの刺激に反応しホメオスタシスを維持する。しかしここで維持される恒常性とは維持する値打ちもないものなのだ。と言うよりも語り手にとっては普通の肉体的器官により維持されている世界は存在する価値がないといえよう。

Take down its ears first,  
Carefully, so they don't spill over.  
With a sharp whistle slit its belly open.  
If there are ashes in it, close your eyes  
And blow them whichever way the wind is  
pointing.  
If there's water, sleeping water,  
Bring the root of a flower that hasn't drunk  
for a month. 6

だから耳は取り壊され、腹部は強力で鋭く口笛を吹くために唇で作った小さな穴から空気を噴出させる、その反動："some sort of inner pressure"が腹部の強い緊張を生み腹を割く。この「内側からの圧力」は、先のSimicの言語観にみたように、言語化されていないものが、ある種の内側から押し出す力となり、意味の世界へと噴出することをあらわすのだろう。"spill"によって喚起された液体のイメージは水を、口笛を"blow"するイメージは"wind"をひきだし、続く"if"ではじまる2つの条件文では、口笛を吹くと同じ要領で吹き飛ばす灰と、水が作品の中に持ち込まれる。灰は死、無感覚をあらわす。"sleeping water"は、淀み活力のないものともとれるが、同時に次のスタンザで夢の中のような幻想的展開の呼び水ともなっているようだ。このスタンザではこの水は「一月も水を与えられなかった花」に与えられ復活の意味をあらわす。死と復活のイメージは、次のスタンザで「骨」のイメージでひとつになる。葬式が肉体を灰にかえし、それが生への営みの一貫に再び組み込むための儀式であるとすれば、この灰と水であらわされる死と復活は、葬式という儀式的制度に組み込まれるかのごとく、次のスタンザで骨と棺桶のイメージへと引き継がれる。

When you reach the bones,  
And you haven't got a dog with you,  
And you haven't got a pine coffin  
And a cart pulled by oxen to make them  
rattle,  
Slip them quickly under your skin.  
Next time you hunch your shoulders  
You'll feel them pressing against your own.  
(SP 31)

骨のイメージは犬がくわえる骨と、牛によって引かれる荷車にのり松の板で作られた棺桶の中でカラカラと音を立てる骨へと結びつけられる。犬も、棺桶も、牛の引く荷車も"you haven't got"と否定されるが、犬、牛の引く荷車、棺桶の明確なイメージは骨となった沈黙のビジュアルな表現となる。

次に「沈黙」の身体の中から取り出した骨を身につけよとの語り手の提案により、状況は一変する。つまり今までの骨の外部視覚的イメージは、"you"と語りかけられるものによって体感される身体的イメージへと変わる。それに伴い「沈黙」の身体を解体してきた作業は、語り手により"you"へと手渡される。そして最後のスタンザで最終段階を迎える。

It is now pitch dark.  
Slowly and with patience  
Search for its heart. You will need  
To crawl far into the empty heavens  
To hear it beat. (SP 31)

真っ暗闇の中での"heart"探しは、Joseph ConradのHeart of Darknessを連想させる。そこでは主人公、マーローは川を遡航するが、ここでは"you"は「空虚な空」へとはるばる這うようにゆっくりと忍耐強く遡上する。"you"が体験する旅は、マーローが経験したのと同じように寂寞感の甚だしい孤独や、既存の価値観ではとらえることのできない解体された文化的状況であろう。解体された静けさがならず音は、このような旅の後に聞くことができるのである。ただこの音はどのような音なのか具体的に示されることはない。ここで"you"が聞く音こそSimicのいう、"maternal silence"なのである。

## 2. Maternal silenceを言語化する作業としての翻訳

"maternal silence"がどのようなものであるのかを考  
えるために、4つのスタンザから構成されている彼  
の作品"The Point"を例に論証する。この作品は"This  
is the story"と始まるが、この"this"が何を内包するの  
かを探ることが作品の「ポイント」となっている。

This is the story  
Afraid to go on.

This is the iron cradle  
Of the stillness  
That rocks the story  
Afraid to go on.

How it regrets  
The loss of its purity,  
The madness of this  
Single burnt consonant,

Which now sits,  
Shy, solitary,  
Among all these  
White spaces. (SP 76)

「これ以上先に進むことができない物語」はキー  
フレーズで、第一連以降言い換えられていく。伝える  
ことを停止した物語は、母のイメージを持つ「沈  
黙でできた鉄のゆりかご」に揺籃される言葉を知ら  
ない赤子である。純粋さを失ったことを後悔する赤  
子は、言語化能力を獲得した人間であろう。しかし  
赤子は「ひとつの燃えかすとなった子音」となる。  
赤子が純粋性を失って後悔したり、燃えかすとなる  
のは、この物語がこれ以上先へ進むことができな  
い、言語化される以前の状態で立ち戻され、沈黙と  
なり表現を取り消されて、だだの「痕跡」へ還元さ  
れたことを意味する。この場所では意味的な静止で  
はなく、意味が常に揺れ動き続ける力が存在するよ  
うだ。揺すられる赤子の存在は子音の中で次ぎの揺  
れを呼び起こす。この子音はその語源にあるように  
「共鳴、共振」を求めつつ狂気をはらむ。さらに  
真っ白のページの上で他者から遠ざけられ、孤独な

状況に陥る。7 狂気は次ぎのスタンザで、夢が  
導入され起動する。夢は語る主体も対話者の区別が  
なく、たった一人で語る言語だからだ。8

And it dreams,  
The story afraid to go on.

In its dream it builds itself  
In the shape  
Of the gallows-tree.

When the gallows are completed,  
It hangs by the neck  
What's left of its dreamings.

Underneath, in the dirt  
The shadow of its beginning  
Comes to nibble  
Its quivering feet. (SP 76-77)

揺籃され夢見ながら第一スタンザでの状況はさら  
に発展する。物語は絞首刑用の木の形に姿を変え  
る。先ほどの子音は"t"だったのだろうか。そして  
共振して夢の中で隔離された囚われのイメージへ姿  
を変容する。何本もの木に吊るされるのは数々の夢  
からの残滓である。吊るされた囚人たちの痙攣する  
足先をつつくように、長く影法師がのびる。それは  
基盤を失って宙ぶりになった存在の痕跡であり、同  
時に実存的イメージが存在することの証明である。  
実存的イメージとは、あるコンテクストのなかで一  
時的に定着し「出来事」となったもののことを意味  
している。夢のなかでは主体は同時に他者であり、  
狂気を自らの外へ排除することなく、自らの内に包  
摂することない、矛盾が矛盾でなくなる世界が生じ  
るといえるだろう。葬られる夢の残滓とその影法師  
のイメージは、第一スタンザの最後にみた沈黙と孤  
独の状況を増幅する。

There's no point,  
Says the story  
Afraid to go on.

It's all a question  
Of the mote

In your eye.

It watches

As you watch.

Perhaps this evening

Reflects its final blackness,

Reflects its final mourning

Before it dissolves

Into a tear? (SP 77)

They found a slip

Of the tongue.

Inside the tongue

A loose hair.

Inside the hair,

They found

Whatever

Is destroyed

Each time

It is named. (SP 77-78)

第三連では鏡のイメージが作品の展開を支配する。「no point」は物語には語るべきものがないことを示し、その空間の意味的な空虚さが暗示される。この空間では他者へ向けた視線が、自らへと折り返される：「It watches / As you watch.」もともと「you」と名指されるものは匿名性を持つ他者であるし、代名詞「it」もシニフィエなきシニフィアンであり、空虚なシーニュである。特定のものでもあり、同時に特定のものではない「you」と「it」は、互いを意味的に規定することなく/できずに視線を永遠に交換し続ける。それは主体は他者によって送り返される自身のイメージによってしか自己を特定できないから、特定できないものどうしの視線の交換は、お互いを鏡とし折り返し続ける運命にあるのだ。

また「the mote in your eye」は、マタイ伝7章3節での次ぎの説話からきている。自分の目のチリは本来気がつかないが、人の目についたごみにはすぐ気がつくこと。転じて人の大きな欠点にはすぐ気づくが、自分の小さな欠点には無頓着であることをあらわす。「blackness」, 「mourning」につけられた「final」は、この物語の存在する空間がとことんミニマルであるという状況を示している。物語は「the mote in your eye」として涙の中に溶解する運命のようだが、その前に究極の「blackness」, 「mourning」を視線にのせて折り返してくる。

After its death

They opened the story

Afraid to go on.

And found nothing.

Inside nothing

この物語はもともと行き着く場を失っている、いわば「沈黙」なので、最終スタンザでその物語の中に「虚無」"nothing"を発見するのも当たり前である。しかし第三スタンザで見たようにこの「虚無」の中は何もない空間ではない。絶え間ない視線の交換が行われる場である。墓場であり同時に分娩室である。名付けられる度に破棄されたものが存在する、言語揺籃空間である。言い換えやほどけた髪で表現されるのは、言葉と言葉の結節がほどけてしまう狂気が支配する空間である。また「a slip / Of the tongue」は字義通りにとることも考えられる。つまり身体を動かすことと、精神を働かせることを同一視する行為遂行的論理への結びつけられよう。9 そしてここから生まれる物語は常に書き換えられ、揺れ動き続ける言語「行為」となる。その場所がここで表現される「point」であり、「maternal silence」なのだ。

「maternal silence」をSimicは次ぎのような比喩で語っている。

"Maternal silence" is what I like to call it. Life before the coming of language. That place where we begin to hear the voice of the inanimate. Poetry is an orphan of silence. The words never quite equal the experience behind them. (UC5)

言い換えれば、これはあることを経験したとき、あまりのことにその経験を言葉にできない、「筆舌に尽くしがたい」経験のことといえるだろう。ただ表現できないからといってそこであきらめてしまうのではない。「筆舌に尽くしがたい」経験を名付け

ようとする欲望が狂気であるのだから。ともあれ言葉になるまえの沈黙と、言葉による表現の境目を分かち境界線、そこに"maternal silence"は存在する。

二カ国語を使う彼の意識では、"maternal silence"から言語への変換は、"translation"なのだ。彼は"translation"を、もっとも根本的で哲学的な活動と定義している。

To translate then is not only to experience the difference that makes each language distinct, but equally to draw close to the mystery of the relationship between word and thing, letter and spirit, self and the world. To translate is to awake and find oneself in the universal house of mirrors. (UC118)

I'm in the business of translating what cannot be translated: being and its silence." (UFT109)

このような翻訳の有用性についてのSimicの考え方は、フェルマンの次ぎの考えと重ね合わせたときより明確な姿となる。

肝要なことは、ひとつの言語から他の言語へと移り行き、複数言語間の境界を乗り越え、(ただ単に)翻訳することに留まらず、自らを複数の言語の他者性に向かって翻訳することであろう。... ひとつの言語の内に他の言語の奇異性を引き入れること、ここの言語において、それが我々の言葉を規定している言語学的な決定事項を揺るがし、複数言語の間に決定不可能な場所に、語る自由を浮上させようとするのである。10

客観的現実という空間は、自我の主観性という鏡に映し出された世界であるが、"translation"はその空間で自我を目覚めさせ認識させる活動というわけだ。従って"translation"は文字で書かれた作品の以前に立ちあらわれることになる。話す度にtranslation活動を繰り返すのだ。そして我々の意識とは翻訳不可能な初出のイデオム、ほんの少ししか語らずに、多くのことを意味する慣用的いいまわしでもある。Simicはこのようなtranslatorの夢を次ぎのように表現している。

The dream of the translator is to experience a self that is on the verge of utterance, to catch it in the very instant before it has divided itself into logos and melos. (UC 119)

この自我こそが詩人の彼にとっての、無限にすくい取られる"Mother Tongue"「母語」なのだ。そして詩は母なる沈黙からうまれたそのとたんに、孤児として表音空間に送り出されることになる。

このSimic特有の"translation"のアイデアについて、Tomislav Longinovicはパイパーのなかで、彼の移民としての背景を考慮に入れ、次ぎのように捕らえている。

translationとは自我や家族、国家などと自我との同一化の幻想性に焦点を当てて、文化を読みかえる過程である。その一方では母国を離れた状態で母国語を徐々に忘れていくことで、シミックは常に現在を再創造し続ける。なぜなら過去の自我との連続性は保証されていないからだ。(Longinovic 155)

### 3. Maternal silenceから生み出される世界

言葉と経験は決して完全な一致を見ることはない。その前提のもとで詩人が語り始めるとき、言葉と経験の一致に疑いを持ってしまいが、ともあれ自分の許容できる範囲で最小の一致をみいだすことになる。その一致したものが自分の予測したものと違う場合、今までのコンセプトの枠組みを捨てて、そこで示された方向性に従って次の一致する関係を見いだそう試みる。その連続により言語化されていく世界は、詩人もまったく予期しなかった詩へと結実するだろう。

ここでSimicの作品、"Euclid Avenue"を読みながら詩人のコンセプトを言語化する過程をたどり、"maternal silence"から生み出される世界がどのように機能するのか検討してみる。

All my dark thoughts  
laid out  
in a straight line.

An abstract street  
on which an equally abstract intelligence

forever advances, doubting  
the sound of its own footsteps. (SP 128)

"All my dark thoughts"は言語化以前の複雑な経験が言語化され思考となり、文章化する。その物語は町並みとして構築される。そして語り手はまっすぐに並べられた自分の暗い思考にそって前進する。"my dark thought ... in a straight line"には意味論的な線状性、"linearity"を感じさせる。その通りに沿って進む語り手も、抽象的な知性を備えて言葉によって作り上げられた抽象的空間を進む。経験を抽象する力を携える語り手の歩みは決して断固としたものではない。"doubting / the sound of its own footsteps"と自らの知性の立てる足音に疑いを持っているのだ。足音は語り手の抽象的な思考が作り出す町並みに響いては消えていく。それは語り手が経験と言葉の完全な一致という概念に疑いをもっているからであろう。

Interminable cortege.  
Language  
as old as rain.  
Fortune-teller's spiel  
  
from where it has its beginning,  
its kennel and bone,  
the scent of a stick  
I used to retrieve. (SP 128)

しかし彼の行進は止まることのない。いにしえから続く知的活動、経験の言語化は我々一人一人に先験する。我々とはとぎれることなく続く列に加わり歩み続けなければならない。ここでも"cortege":葬列と"rain":雨=水のイメージが導入され、言語的な表現の死と復活が暗示される。この場から生み出される表現には、はっきりとした根拠や枠組みがないことが、占い師の口上とこの活動が並置されることから推しはかることができる。占い師はどこからともなくわいてきた靈感に導かれ、あるいは目の前に展開するカードの配列の一度きりの偶然性により、客に人生の方向性を示すのだ。語り手の言葉もそれと同じように始まる。抽象的知性がある言葉と偶然に遭遇し物語は始まるというわけである。11 そして語り手は犬のイメージをになわされる。犬のこと

をSimicは"pathetic, melancholy, silly, faithful"な人間に近い動物としてここで使っているようだ。犬が道を行くように、その嗅覚という感覚がこの偶然の出会いをかきわけける。以前にかいだことのある臭いの記憶と、現在の経験を結びつけようとする。これは記憶のなかの時間と場所を結びつけようとする行為を意味していると考えられる。

A sort of darkness without the woods,  
crow-light but without the crow,  
Hotel Splendide  
All locked up for the night.

And out there,  
in sight of some ultimate bakery  
the street-light  
of my insomnia. (SP 128)

"darkness without the woods"は街灯の明かりのない都市ジャングルの闇と、"crow-light"は雨にぬれた舗装道路のアスファルトが反射する光をあらわす。鍵のかかった、おそらくは窓に明かりの見えないホテルSplendideは、闇と光を同時に兼ね備えている。これらは語り手の眠ることないイマジネーションの光が照らし出す風景なのだ。その光はパン屋のパンを焼く火と、その火で焦げた窯への連想へ読者を導く。あるいは素材を混ぜ合わせ、練ってパンきじを造り、それを焼いて形状を固定させるといったパン製造の過程を、イマジネーションの働きに重ねているのかも知れない。それゆえこのパン屋は"ultimate bakery"なのであろうか。ともかく二律背反する明と暗の結びつきが、二つのスタンザのなかでイマジネーションの連鎖的融合を生み出す。

A place  
known as infinity  
toward which that old self  
advances.

The poor son of poor parents  
who aspires to please  
at such a late hour.

The magical coins

in his pocket  
occupying all his thoughts.

A place known  
as infinity,  
its screendoor screeching,  
endlessly screeching. (SP 129)

この場所は古い自我が何世代ものあいだ通った、無限へと連なる場所であることがしめされる：“the poor son of poor parents / who aspires to please / at such a late hour”そして語り手の人称は“I”から“he”へと変わる。作品の冒頭で“All my dark thoughts”とされたものは“all his thoughts”と言い換えられる。これにより客観的な視点が導入されると同時に、“The Point”で見たように、主体と他者は堂々めぐりの視線を交わし続け、主体と他者の関係も入れ替え続ける。それゆえにこの場所は“A place known / as infinity”なのである。

語り手の進路は直線として始まり、それは思考が言語に変換されたときの文法の線状性を示していたかに見えたが、ここにきてイマジネーションの自由さによって生じた偶然性と、そしてその結果生まれた二律背反する明と暗の融合を考えると、運動の質が直線から円環運動へと変化しているようだ。さらに二律背反性の融合と円環へのイマジネーションの方向変化に従い、裏と表を持ち、なおかつ丸い形状のコインへとイメージは移動する。そして語り手の思考はこのポケットに入ったいくつかの不思議なコインのことで埋め尽くされることになる。通貨は交換することによって価値を発揮する。しかも自分のものであり、なおかつ誰のものでもある“anonymity”「匿名性、無名性」を兼ね備えている。言葉がコミュニケーションする、考えを伝達する道具であり、誰のものでもあるという共通性に支えられた“anonymity”をもつこととの一致をここにみることができる。

最後に防虫網の張ってあるドアへと語り手は吸い込まれ、彼の探索も終わりを告げるように思える。しかし無限へとむかう探求心におわりが無いことは、“its screendoor screeching, / endlessly screeching”と、ドアが絶え間なくきしみながら揺れ続けることで示されているようだ。おわることなく：“interminable”にこの行進は続く。きしむドアが板ば

りではなく、網張りのドアなのは言語テキストの編み目を暗示するのであろう。

この作品自体が一つの有機的な比喻となり、詩人 Simic が詩を書き上げる過程で“maternal silence”のなかにただようコンセプトと偶然結びついた単語あるいはフレーズとの出会いがある方向性を与え、イマジネーションの自由な動きのなかでさらに次ぎの偶然へと結びつき新たな方向へと進んでいく創作の過程を読者も追体験しているようである。

この“Euclid Avenue”は一つの詩が、いくつものイメージの連続として機能すると言うより、まるで一つのイメージのように機能しているといえる。Simic は狂気と言うべき力の渦巻く場である“maternal silence”を創作の力を得る場として利用し、言葉以前のものを言葉へと翻訳することで詩を創作する。言葉が生まれ破壊される場でもあるその場で、偶然の出会いにより生まれた言葉の結節を紡ぐことで作品に非一意味を与えようとするのだ。その結果このように作品全体がひとつのイメージとして機能するような詩が生まれることになる。

#### Notes

1 Simic が二つの言語を使用できることで、作品の中に独特の言語感覚が見られることを Robert B. Shaw は指摘している。

Simic's exploration of the springs of myth is convincing because it is conducted by means of an exciting exploration of language. While his mastery of English is beyond that of most native speakers, this poet's experience of writing in a language not his first must give him a special awareness of the innate mysteriousness of words.

Robert B. Shaw, "Charles Simic: An Appreciation." *Charles Simic: Essays on the Poetry*, Ed. Bruce Weigl (Ann Arbor: U of Michigan P. 1996) 144. Simic のこの本からの引用は以降引用部分末尾の丸かっこ内に、CS とし頁数を示す。

2 Tomislav Longinovic, "Between Serbian and English: The Poetics of Translation in the Works of Charles Simic" (CS 148)

3 Charles Simic, *The Uncertain Certainty: Interviews, Essays, and Notes on Poetry* (Ann Arbor: U of Michigan P. 1996) 55. Simic のこの本からの引用は以降引用部分末尾の丸かっこ内に、UC とし頁



数を示す。

4 Charles Simic, *The Unemployed Fortune-Teller: Essays and Memoirs* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1995) 112-13. Simicのこの本からの引用は以降引用部分末尾の丸っこ内に、*UFT*とし頁数を示す。

5 Simicは、詩を空間という意識でとらえ、その場で言葉にならないものを言語化する、空虚なシニフィアンを近似的な意味を持つシニフィエで埋める作業を展開する場と考えている。

The poem that thinks is a place where we open to "It." The poem's difficulty is that it presents an experience language cannot get at. Being cannot be represented or uttered--as poor realists foolishly believe--but only hinted at. Writing is always a rough translation from wordlessness into words. (Simic, *Wonderful Words, Silent Truth* 66)

6 Charles Simic, *Selected Poems 1963-1983: Revised and Expanded* (New York: George Braziller, 1990) 31. Simicの作品の引用はこの版により、引用部分末尾の丸っこ内に、*SP*とし頁数を示す。

7 この「白い空間」にのこされた痕跡はマラルメの言う「君の行為は、いつでも紙に働きかける。なぜなら、瞑想することは、痕跡なしに消え去ってしまうし、また本能も君がどんなに熱烈で没頭した身振りで探し求めようと、高揚しないからだ。」を思い起こさせる。マラルメ、(松室三郎ほか訳)「限定された行動」『マラルメ全集II デイヴァガシオン他』、(筑摩書房、1989年)245-46。

8 夢の中での主体と他者の同一化は、フェルマンがフーコーの哲学の狂気を次ぎのようにかみ砕いて我々に呈示してくれた問いへの答えとも言えよう。「閉じこめることなく(狂気を閉じこめることなく)いかにして理解するのか、と。自らから排除せず、また自らの内に包摂することもなく、いかにして<他者(l'Autre)>を理解できるのか。<主体(Sujet)>を対象(客体)としてではなく、<主体(Sujet)>として思考することは可能だろうか。」フェルマン 57。

9 オースティンは「私は何々をしようとき実際にその行為を遂行している」という発言を、行為遂行的発言として定義づけようとした。ここでは実際の行為として「舌を滑らす」ことと、その比喩的な意味である、「言葉を言い違える」ことは別々のことではない。表現と行為が同時に遂行され

る「行為遂行的発言」と考えられる。J.L. Austin, 「行為遂行的発言」, 『オースティン哲学論文集』 379-409参照。

10 フェルマン 23。

11 Simicの創作には"chance"が重要な要素を占めている。

To see what comes next, I'll call on chance for help again. My premise in this activity is that the poet finds poetry in what comes by accident. It's a complete revision of what we usually mean by creativity. ... I open myself to chance in order to invite the unknown. I'm not sure whether it's fate or chance that dogs me, but something does. (*UFT* 16)

### Works Cited

- オースティン, J.L. (坂本百大監訳) 「行為遂行的発言」, 『オースティン哲学論文集』, Ed., J.O. Urmson and G.J. Warnock, 勁草書房、1991.
- フェルマン, ショシヤナ. (土田知則訳) 『文学的事象と狂気』. 水声社、1993.
- マラルメ, ステファン. (松室三郎ほか訳) 『マラルメ全集II デイヴァガシオン他』 筑摩書房、1989.
- Shaw, Robert B. "Charles Simic: An Appreciation" *Charles Simic: Essays on the Poetry*. Ed. Bruce Weigl. Ann Arbor: U of Michigan P. 1996.
- Simic, Charles. *Selected Poems 1963-1983: Revised and Expanded*. New York: George Braziller. 1990.
- *The Unemployed Fortune-Teller: Essays and Memoirs*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1995.
- *The Uncertain Certainty: Interviews, Essays, and Notes on Poetry*. Ann Arbor: U of Michigan P. 1995.
- *Wonderful Words, Silent Truth: Essays on Poetry and a Memoir*. Ann Arbor: U of Michigan P. 1997.
- Longinovic, Tomislav "Between Serbian and English: The Poetics of Translation in the Works of Charles Simic" *Charles Simic: Essays on the Poetry*. Ed. Bruce Weigl. Ann Arbor: U of Michigan P. 1996.
- Weigl, Bruce Ed. *Charles Simic: Essays on the Poetry*. Ann Arbor: U of Michigan P. 1996.

(受理 平成10年 3月20日)